

# 愛媛生協病院（松山市） 地域包括ケア病棟のこれから

高齢者が人生の最期まで、住み慣れた地域で自分らしい生活を続けられるように「医療や介護、生活支援を提供する「地域包括ケア」の整備が進んでいる。愛媛生協病院（松山市来住町）は2016年9月、骨折や肺炎などで入院し、すぐに退院をするには不安のある患者に対し、在宅復帰に向けて医療の管理やリハビリを行うことを目的とした「地域包括ケア病棟」（44床）を新設した。今村高暢院長（53）、藤瀨民総看護師長（48）、松田清美4階病棟師長（45）にその役割と今後の展望を聞いた。【聞き手は毎日新聞松山支局・成松秋穂】

## シリーズ 地域医療を考える



地域包括ケア病棟で理学療法士（右）と歩行のリハビリをする患者

——地域包括ケア病棟を新設した経緯を教えてください。

今村 在宅復帰に向けたリハビリ機能を強化しようと、14年に地域包括ケア病棟を12床導入しました。その後の増床を経て、16年9月から全病床の半数、4階フロア全てを同病床としたため「地域包括ケア病棟」となりました。

### リハビリでの転院も増加

——どのような患者さんが対象になりましたか。

今村 院内の一般病棟から移動してくる患者さんが中心ですが、整形外科の手術で短期的に直接入院される患者さんや、リハビリ目的で他の病院から転院してくる患者さんも増えてきました。

松田 骨粗しょう症による圧迫骨折で、手術を必要とせずに約1カ月間、患部を固定して安静にしながらリハビリをする患者さんや、従来の大きな病院ではなかなか受け入れられなかった、肺炎などで1、2日経過を見るために入院される患者さんなどもあります。

# 入院最大60日 在宅復帰へ一貫支援

援を行っています。

——患者さんにとってのメリットは何ですか。

今村 特に高齢者は「ちょっとした病気がきっかけとなって、身体機能などに問題

が出て、元に戻るのに時間を要することがあります。そういった場合に、時間をかけて対応ができることです。

藤瀨 従来の病棟であれば、平均的な入院期間は1週間から10日間程度で、そのまま自宅への退院が困難な場合には別の病院に転院してもらう必要があります。地域包括ケア病棟は最大60日まで入院でき、帰宅先を家族と相談することや介護保険の変更などの準備、リハビリによる着替えや歯磨き、排せつなどの日常動作に関わる機能の回復に時間をかけることで、在宅復帰まで一貫してサポートすることができるようになりました。平均的な入院期間は30日前後です。

——退院を支援する体制を教えてください。

藤瀨 病棟の看護師のほか、退院先の調整を専門とする看護師も2人おり、社会福祉士や精神保健福祉士と連携して、ご家族との面談や保険などの書類事務手続きの支

報を交換し、状態を正確に把握することで、それぞれの患者さんが最も快適に療養できるように支援します。

### かかりつけ医と連携強化

——かかりつけ医などの連携も大切ですね。

今村 松山市東南部の医療施設や介護事業所との連携を強化し、患者さんの状況について話し合っています。患者さんが退院後に受診する地域のかかりつけ医を紹介することはもちろん、今年5月からは「機能強化型在宅療養支援病院（連携型）」として近隣の4診療所と連携協定を結び、自宅や介護施設などで療養している患者さんの容体が急に悪化した際、受けいれる状態にしています。在宅診療を受けている患者さんの後方支援も積極的に行っていきたいと思っています。

——病棟ができたことで変化はありますか。

今村 高齢の患者さんは認知症を合併していることがあります。地域包括ケアの中核を担う病院として「認知症の方に対して一番優しい病院になろう」と、全職員が認知症の理解を深める「認知症サポーター養成講座」を受講する取り組みを始め、既に約半数が受講しました。

松田 認知症の人とその家族をはじめ、地域に住んでいる人など誰でも立ち寄ることができる場として、今年度から月1回「にじいろカフェ（認知症カフェ）」を開いています。情報交換などを通して、認知症の理解を深め、介護されている方のスト

レスや不安を少しでも軽くできればと思います。

今村 16年度の診療報酬改定で新設された「認知症ケア加算2」も取得し、認知症の方へのケアも充実させ始めています。また、医療生協組合員の協力で、病棟で認知症の方に寄り添う「見守りボランティア」も導入しています。

松田 当院ではできる限りの「拘束しない看護」を導入していますが、看護師や職員の詰め所は緊急の呼び出しなどで人の出入りが激しく、そんなとき「見守りボランティア」の方に、患者さんのそばにいていただけることは心強いです。現在は週1回に限定されていますが、そばに誰かがいるだけで患者さんは驚くほど心が穏やかになります。

### 患者の変化 気付きやすく

——医療スタッフにとっての変化はありますか。

松田 患者さんに時間をかけて対応できるようになったことで、「この患者さんはどこまでできるようなれば家に帰れるか」と考える意識が養われました。当院は松山市の2次救急輪番病院として8日に1回の救急日に多くの救急患者の入院があります。病床として運営していたころは、その慌ただしい状況下で患者さんに対応していましたが、落ち着いて対応できるようになったことで、わずかな変化にも気づけるようになりました。

藤瀨 看護師に対し、患者さんの退院後の生活を見据えた看護に関する研修をさらに進められればと思っています。「この患者さんはこれからどのように生きていきたいのか」ということを皆で考えて行ければと思います。

——今後の展望を聞かせてください。

今村 地域包括ケアは厚生労働省の方針に沿って整備が進められており、今後も様態の変化はあると思います。当院としては、今後は「レスパイト入院」や「看取り入院」などへの対応を拡大していく予定です。レスパイトとは「休養」という意味で、ご家族の介護疲れの予防や、一時的に在宅介護が困難になった場合に、医療保険を利用する入院のことをレスパイト入院と言います。介護保険対象のショートステイでは受け入れが困難な、医療的な処置を必要とする患者さんが入院することがあります。さまざまな患者さんにとって医療と地域の架け橋となる病院で在り続けたいと思います。



▲今村高暢院長（中央）、藤瀨民総看護師長（左）、松田清美4階病棟師長（右）



スタッフによる検討会も定期的に行われている